

5 1 イエスがマタイを呼び出した時、
マタイは椅子に腰掛けていたのか。

2013・2023

真鍋友範



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ

マタイの福音書9-9には、【イエスは、収税所に座るマタイの姿を見た。】と記述されている。

ごく普通の画家がこのマタイの召命シーンを描くなら、マタイは椅子に腰掛けた姿で描くに違いない。また見る側もその姿を先に連想する。

しかし、カラヴァッジョは天才的画才の男だ

何と、マタイは中腰の姿だった。

これには少し説明が必要だ。

確かに、窓越しに見たマタイは椅子に腰掛けていたが、時間の経過とともに、人はその動作を変えるという本質的な特徴だ。

イエスが窓からマタイを見て、建物の玄関から回って、収税納税作業の進む税務室内に移動するまで数分の時間が経過する。

この数分の間に、何が進行したのか。

カラヴァッジョは、これを描きたかったに違いない。

室内では、税務処理が進行中であった。

納税額は決定し、ヒゲの男はコインを右手から机に置き始めていた。若い収税人は、数を数えようと、しっかり納税額を数え始めている。当然イエスたちの入場には気づかない。

そこで、若い収税史の上司である眼鏡の老人マタイは、椅子から立ち上がり、この集金作業を見守る為に。身を乗り出したのだ。45度程の角度のマタイの背中のラインを真似てみれば、誰だって手を机に置いて体幹を支えるしかない体勢だ。

マタイの左手は、当時、まだ鶴首の発明される前のメガネを持って顔に当てていたのだから、直接に描かれてはいないが、右手は体幹を支えている姿だ。

つまり、税務作業の進展過程によって、時間に沿って姿勢を変えているのだ。

そこまで描いたのが、カラヴァッジョという画家の素晴らしいところだ。

しかし、この描かれたマタイの姿を見て、立っているとの誤解が生じることになる。*絵痴の人には理解できない場面だろう。

また、厳密に聖書の記述を描いていないと、文句を言う人が現れるかもしれない。

マタイは机に寄りかかっている。つまり、【立っている姿の定義が、二本足で体幹をまっすぐに支えている姿】ならば、マタイは右手と両足の三点で体幹を支える姿であり、【立ってはいない、寄りかかった姿】なのだ。

だから、この後、マタイは【立ち上がりイエスに従う】必要があり、聖書の記述との矛盾は無いのだ。もしも矛盾があったのなら、当時のカトリック教会は受け取らなかったはずだ。

あまりにも素晴らしいカラヴァッジョの表現力と聖書への深い知識に対し、
* 絵痴でない限りに於いて、鑑賞者は皆脱帽させられるのではないか。

* 絵痴（えち） 絵画音痴の略。絵画を正確に読み取れない人 音痴の対語（造語）